

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：37125

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K17571

研究課題名（和文）DMD患者の家族のSOCを育む家族支援ガイドラインの開発

研究課題名（英文）Development of family support guidelines to foster sense of coherence for families with Duchenne muscular dystrophy patients

研究代表者

山口 智治（Yamaguchi, Tomoharu）

聖マリア学院大学・看護学部・講師

研究者番号：80784826

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：DMD患者の家族のSOCを育む家族支援ガイドラインを開発することを目的とした。調査の結果から、DMDの患者の家族がSOCの育みを志向した看護実践として、【家族の把握可能感に関わる看護】、【家族の有意味感に関わる看護】、【家族の処理可能感に関わる看護】、【家族の問題解決力に関わる看護】の4つの概念が示唆された。DMD患者や家族、実際に関わる医療者から聞き取り調査を行い、DMD患者や家族がSOCを育む家族支援ガイドラインの開発に着手する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究でDMD患者の家族のSOCを育む看護実践の特徴とそれに関連する要因が明らかとなる。DMD患者の家族へのSOCに関する看護実践の報告はなされていないことから、本研究が基盤となり、今後発展しうるものと考えられる。

また、現在、DMDの診療ガイドラインにより診療の均霑化が進められているが、家族支援の具体的な方策については網羅されていない。家族の健康に家族のSOCが関係することが予測され、診療の変化が家族の維持に影響を及ぼしている現代において、DMD患者の家族のSOCを育む家族支援ガイドラインの必要性は高いと考える。本研究の結果をその資料とし、発展させる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop family support guidelines to foster SOC for families with DMD patients. The results of the survey suggested the following four concepts as nursing practices oriented toward fostering SOC for families with DMD patients: [nursing related to family sense of Comprehensibility], [nursing related to family sense of Meaningfulness], [nursing related to family members' sense of Manageability], and [nursing related to family problem-solving skills]. We interviewed DMD patients, their families, and health care providers involved in their care, and began the development of family support guidelines to foster SOC for families with DMD patients.

研究分野：生涯発達看護分野

キーワード：sense of coherence 家族 Duchenne型筋ジストロフィー

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

Duchenne 型筋ジストロフィー(以下、DMD)は進行性の神経筋疾患であり、10代で亡くなる疾患とされてきたが、医学の発展と治療効果の向上・社会情勢の変化に伴い生命予後が改善してきた。DMD 患者の家族は、様々な課題に直面してもそこで立ち止まるのではなく、家族としてそれまでに培ってきた経験や、家族員同士や医療者、関わる人々の協力をベースに、直面する課題を把握し、その家族なりの健康を潜在的に志向しながら、生じる変化に適応しようとしている。これについて先行研究を概観すると、sense of coherence (以下、SOC) 概念の「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」と同義であることが予測された。

SOC は、保健医療社会学者 Aaron Antonovsky が極めてストレスフルな出来事や状況に直面させられながらも、それらに成功裏に対処し、心身の健康を害せず守れているばかりか、それらを成長や発達の糧にさえ変えて、明るく元気に生きている人々のなかに見いだした、人生における究極の健康要因であり、健康生成論の要の概念である(山崎, 2009)。その下位概念は「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」で構成されており、SOC を育むためにはそれまでの人生経験や「汎抵抗資源」が影響するとされている(山崎他, 2008)。

本研究は、このような家族のありようを SOC 概念で捉え、DMD 患者の家族が SOC を育み、家族の健康の維持・増進を目指すために行っている看護師の看護実践の実態を明らかにするものである。

2. 研究の目的

DMD 患者がいる家族が SOC を育むために実践している看護の実態と関連する要因について明らかにする。また、DMD 患者がいる家族が SOC を育むための家族支援ガイドライン開発の示唆を得る。

3. 研究の方法

1) 対象者

日本筋ジストロフィー協会が HP 上で紹介する専門病院であり筋ジストロフィー専門病床を有する 29 施設の中で、能登半島地震の被害地域である石川県、新潟県、富山県の 3 施設を除く 26 施設の、在宅療養生活をされている DMD 患者やその家族に関わりのある看護師 1000 名とした。また対象となる看護師は看護部長・副看護部長を除く看護師を対象とし、性別・年齢・看護師経験年数、所属部署経験年数などに制限を加えないこととし、調査協力の得られた看護師とした。

2) 調査方法

郵送法による無記名式自記式質問紙調査法

3) 調査用紙の作成(調査内容)

質問項目の作成については Aaron Antonovsky が提唱する SOC の下位概念である「把握可能感」「処理可能感」「有意味感」の意味内容を確認しながら、山崎ら(2008)の「SOC を変化させる方法—3 種の下位概念別修正アプローチ」を参考に、「把握可能感への働きかけ方」に 15 項目、「処理可能感への働きかけ方」に 14 項目、「有意味感への働きかけ方」に 8 項目の質問項目を作成することとした。また、看護師が必要と考えている看護実践と実際に行っている看護実践の 2 つの側面から測定するために、それぞれについて同じ内容を 6 段階のリッカート尺度を用いて回答を求めた。加えて、質問項目以外に、DMD 患者のご家族への看護として実践されていることについて記述欄を設け回答を求めた。

また、DMD 患者の家族の SOC を育む看護実践に研究対象者自身の特性や研究対象機関の特性が影響していないかについて調査するために、研究対象者の性別、年齢、看護師経験年数などや、病棟の特徴、病床数、職員数、受け持ち人数、看護方式などの内容も調査を行った。

(1) 内容妥当性の検証

作成された質問項目が、DMD 患者の家族の SOC を育む看護実践を測定する項目の内容になっているか、質問内容が適切であるか、表現の不明瞭な項目がないかどうかについて、スーパーバイザーへ依頼し、検討した。

(2) 表面妥当性の検証

作成された各質問項目について、対象者が回答する上で理解困難な箇所、分かりづらい表現、類似質問等がないかについて調べるために、スーパーバイザーへ依頼し検討した。

4) 分析方法

量的記述的研究(統計学的分析)

統計学的処理は統計ソフト SPSS Statistics29 を使用した。

4. 研究成果

12 施設の 368 名を対象に調査を行った結果、回収率 13% (46 名) であった。記述欄には 6 名の研究対象者から回答を得た。研究対象者は看護師経験 4 年目～35 年目の看護師であり、約 70% が筋ジストロフィー専門病棟に勤務していた。

1) DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護の特徴

DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護として、先行文献を参考に「把握可能感への働きかけ方」「処理可能感への働きかけ方」「有意味感への働きかけ方」の 3 つの内容を仮定し調査を行ったが、実際に調査内容がどのような潜在的な因子から影響を受けているのかについて調べるために、DMD 患者の家族が SOC を育むための看護として「実際に行っている」とする全 39 項目を使用し、最尤法による因子分析を行った。因子抽出には固有値 1.00 以上を基準とし、因子のスクリープロットの変化から、4 因子構造が妥当であると考えられた。次に最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。全 39 項目の共通性は .56～.97 の間にあり、全 39 項目で因子負荷量は .40 以上を示した。

4 因子構造を確定したところで、各因子に属する項目について因子の解釈・命名を行った。第 1 因子を【家族の把握可能感に関わる看護】、第 2 因子を【家族の有意味感に関わる看護】、第 3 因子を【家族の問題解決力に関わる看護】とし、第 4 因子を【家族の処理可能感に関わる看護】と命名した。全ての因子の Cronbach's α 係数は .90 以上を示した。また、研究開始当初に想定していなかった第 4 因子を考慮し、質問項目全 39 項目を【家族の SOC の育みを志向する看護】と命名した。

また、調査内容以外に DMD 患者の家族への看護として実践されていることについて、「面会時に患者さんとご家族がお散歩に行ったり、一緒に過ごされている場面の写真を撮って渡す」「母の日など画用紙でカーネーションやメッセージカードを作成し、メッセージを患者さんから聞いて代筆」「声が出ない方の AI ボイス」「母親はキャリアのことが多く、話がうまく伝わらなかつたり、患者をうけいれられず関わりを拒否する人もいますので、むやみにお願いやどう思っているか聞けないことが多い。なので、主に患者や医師にどのような家族なのか患者はどう思っているのか(家族に)確認することが多い」「家族の方が筋ジス関連のネットワークがなく、情報入手の手段がない場合には他の筋ジス家族とのコミュニケーションがとれるようにつないでいます」「御本人と家族の間に入って調整」などの回答を得た。

研究開始当初は DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護として、「把握可能感への働きかけ方」「処理可能感への働きかけ方」「有意味感への働きかけ方」を仮定していたが、家族の問題解決力に関わる実践が DMD 患者の家族が SOC を育むための看護に影響することが示唆された。また、自由記述内容から、DMD 患者や家族が共に過ごす場面を写真で記録に残すことや家族へのメッセージを代筆することを通じた DMD 患者や家族のつながりに関する看護実践や、DMD 患者のセルフケアを高める看護実践、DMD 患者や家族の間に入り調整を行う看護実践など、調査内容以外の多様な看護実践がなされていることが示唆された。そのため、DMD 患者や家族、実際に関わる医療者から聞き取り調査を行い、DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護について、さらに検討する必要がある。

2) DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護に影響する要因

DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護について 39 項目の質問項目を、「必要である」と「実際に行っている」の 2 つの側面から回答を求めたところ、39 項目すべての質問で「必要である」の回答が「実際に行っている」の回答よりも高い得点を示した。調査内容について差が大きい順に確認すると、「家族の語りの中で、家族の気持ちの変化や意識の変化が生じる場面があれば、その理由を家族に聞き、家族の振り返りを促す。」「DMD 患者との関わりを通して得た体験について家族が語れるように場をつくる。」「DMD 患者の症状や治療、必要なケアについて、家族 1 人 1 人の捉えが一致しているかを確認する。」が挙げられた。そのため、研究対象者は DMD 患者の家族への看護において、家族が SOC を育めるように関わる意識が高いことが示された。しかしその一方で、両者の差が大きい調査項目 3 項目の内容を鑑みると、家族の課題を家族が自身で達成できるような一歩踏み込んで家族へ関わることの困難さや臨床現場での繁忙な状況などが要因となり、「実際に行っている」に関する得点との差が大きくなったことがうかがえた。

また、対象者の属性や所属施設や部署の属性を独立変数とし、【家族の SOC の育みを志向する看護】の得点と 4 つの因子ごとの得点を従属変数として、t 検定、および一元配置分散分析を行った。その際、多重比較には Tukey 法を採用した。有意水準を 5% とした。

第 1 因子【家族の把握可能感に関わる看護】では、研究論文や雑誌などの文献での家族看護学習歴がある人の方が有意に高い得点を示した。また、看護方式として PNS の〔不採用〕群は〔採用〕の群よりも有意に高い得点を示した。

第 2 因子【家族の有意味感に関わる看護】では、所属施設外のセミナーや研究論文・雑誌などの文献で家族看護学習歴がある人の方が有意に高い得点を示した。また、専門看護師や認定看護師に相談する機会が多い人ほど、得点が高くなる傾向を示した。

第 因子【家族の問題解決力に関わる看護】では、現任教育、研究論文・雑誌などの文献で家族看護学習歴がある人の方が有意に高い得点を示した。

第 因子【家族の処理可能感に関わる看護】では、専門看護師や認定看護師に相談する機会が多い人ほど、得点が高くなる傾向を示した。また、看護方式として PNS の〔不採用〕群は〔採用〕の群よりも有意に高い得点を示した。

【家族の SOC の育みを志向する看護】全体では、研究論文や雑誌などの文献での家族看護学習歴がある人の方が有意に高い得点を示した。また、専門看護師や認定看護師に相談する機会が多い人ほど、得点が高くなる傾向を示した。加えて、看護方式として PNS の〔不採用〕群は〔採用〕の群よりも有意に高い得点を示した。

家族看護学の学習の中で、特に現任教育や所属施設外のセミナーや研修、研究論文や雑誌などの文献は、DMD 患者の家族が SOC を育む看護実践を促進する要因となることが考えられた。また、CNS・CN の存在も同様に、促進する理由となることが考えられた。一方で、PNS 看護方式を採用することによる若手看護師がとらえたデメリットとして、「仕事量の増加」「患者との接触が減る」「熟考することが少ない」などが報告されており(森岡ら, 2017), これらのことが要因となり、PNS 方式を〔採用〕群の得点が下がったことが示唆される。

3) DMD 患者の家族が SOC を育む看護実践の課題と今後の展望

DMD 患者の家族が SOC を育むためにしている看護実践の特徴やその要因について示唆が得られた。家族へ深く関わる困難さを解決するためにも、家族看護学の継続的な現任教育や、家族看護学について専門的に学べるセミナーや研修の周知などを行うことなどが求められると考える。しかし、本調査においては十分な回答数を得られなかったことから、本研究の結果・考察は示唆にとどまるものとする。DMD 患者や家族、実際に関わる医療者から聞き取り調査を行い、DMD 患者の家族が SOC を育むために実践している看護について、さらに検討を繰り返し、DMD 患者や家族が SOC を育む家族支援ガイドラインの開発に着手する。

5. 引用文献・参考文献

森岡広美, 中本明世(2017), 若手看護師が捉えたパートナーシップ・ナーシング・システム(PNS)のメリットとデメリットから離職率低下に向けたサポート方法の検討, 梅花女子大学看護保健学部紀要, 7, 16-26.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------